

チョーキングが及ぼす運動パフォーマンスへの影響に関する研究

船平海斗（鹿児島大学）

1. 目的

本研究の目的は、ゴールキーパーとの駆け引きのプレッシャーを排除した状況においても、実際のPK戦と同じようにチョーキングの状態となり、失敗すれば負けの状況では成功すれば勝ちの状況より失敗しやすいのかを実験により明らかにすることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：18歳～22歳の男女学生計70名
- 2) 調査方法：テニスボールを使用してペナルティーキックを交互に行い、ゴール内に入ると成功、ランダム性の動きのある障害物に当たる、もしくはゴールから外れると失敗とした。3回勝負とし、勝負が決しない場合はサドンデス方式を採用した。また、障害物にはラジコンカーを使用した。
- 3) 分析方法：成功すれば勝ちの状況と失敗すれば負けの状況の2つの状況の成功数と失敗数を数え、集計表にまとめ、成功率に差があるのかを検討するためにカイ二乗検定を行った。また、どの群間で有意差があるのかを検討するためにカイ二乗検定から残差分析を行った。

3. 結果と考察

表1においてカイ二乗検定を行った結果、有意であった ($\chi^2(1, N=53) = 4.27, p = .019$)。 χ^2 値から算出した効果量は ($\phi = 0.28$) は便宜的基準によると小さいと判断された。また、残差分析の結果、成功すれば勝ちの状況において成功の度数が期待度数より有意に多く、また失敗の度数が期待度数より有意に少なかった。失敗したら自分が負けの状況においては成功の度数が期待度数より有意に少なく、また失敗の度数が期待度数より有意に多かった。

表1 各状況における成功数と失敗数

	成功	失敗	行の合計
成功したら自分が勝ちの状況	20	11	31
失敗したら自分が負けの状況	7	15	22
列の合計	27	26	53

実験の結果から、成功したら自分が勝ちの状況で成功するのと、失敗したら自分が負けの状況で失敗するのは、成功したら自分が勝ちの状況で失敗するのと、失敗したら自分が負けの状況で成功するのに比べて割合が高いことが分かった。

Wood and Wilson (2010) からも、実際のサッカールールと同じ条件でPK課題を行い、ゴールキーパーの顕著性がキッカーにプレッシャーを与え、不安操作の効果が高まったと報告している。本実験では、ゴールキーパーに人ではなくラジコンカーを採用し、ゴールキーパーとの駆け引きのプレッシャーを無くした状況で実験を行った。自分の意思を持たないランダム性のあるラジコンカーでもキッカーにプレッシャーを与え、不安操作の効果が高まり、チョーキングの一つの要因になったと思われる。ゴールキーパーとの駆け引きのプレッシャーを無くした状況でも、先行研究と同じような結果になったことで、PK戦ではそれ以外のプレッシャーの要因が強く影響しているのではないかと考えた。

4. 結論

本研究では、ゴールキーパーとの駆け引きのプレッシャーを無くした状況においても、失敗すれば負けの状況では失敗しやすく、成功すれば勝ちの状況では成功しやすいことが明らかになり、チョーキングの影響が現れた。

5. 主な参考文献

- 1) Balk (2013), Coping Under Pressure: Employing Emotion Regulation Strategies to Enhance Performance Under Pressure. *Journal of Sport and Exercise Psychology*, 2013, 35, 408-418.
- 2) Wood, G. & Wilson, M. R. (2010). A moving goalkeeper distracts penalty takers and impairs shooting accuracy. *Journal of sports sciences*, 28, 937-946.